

葵 AOI

No.135

令和7年 夏

徳川美術館

THE TOKUGAWA ART MUSEUM



時をかける名刀

夏季
特別展

P2~4

P5

「時をかける名刀」
関連企画のご案内

エッセイ

P6

90周年
おめでとうございます。

公益財団法人

日本美術刀剣保存協会 会長

酒井 忠久氏

研究ノート

P7

明治時代の
聞香席の再現

P8

展覧会紹介 尾張徳川家 名品のすべて

徳川美術館・蓬左文庫開館90周年記念 夏季特別展

時をかける名刀

第一部 刀装 / 名古屋市蓬左文庫展示室

第二部 刀剣 / 徳川美術館本館展示室

令和7年6月14日(土)～9月7日(日)

展覧会紹介 01 展覧会の見どころ

安藤香織 (学芸部マネージャー)

徳川美術館のコレクションにおいて、圧倒的な数を誇る刀剣類。^{なぎ}長刀や^{なた}鎗・小刀なども含めるとその総数はおよそ1,000口に上り、刀剣に附属する刀装も多数伝来しています。名刀が多いことでも知られており、国宝10口、重要文化財19口、古くから名高い名物刀剣も23口含まれています。こうした質の高いコレクションが形成されたのは、これらを所蔵した尾張徳川家が、御三家筆頭として江戸時代を通じて最も格の高い大名家であり、贈答や購入によってもたらされる刀剣もまた、家の格に相応しい品であったことに由来します。開館90周年を記念する本展では、これら尾張徳川家伝来の優品に、数々の名高い刀剣・刀装を加え、品位ある名刀の「由緒」にも着目しながら名刀の魅力を紹介します。

名刀の由緒として多くみられるのは、戦にかかわるエピソードと、贈答にかかわるエピソードです。例えば「太刀 銘 長光 名物 津田遠江長光」(画像①)は、本能寺の変の後、織田^{のぶ}信長の安土城から明智^{みつ}光秀に奪い取られたというエピソードで有名ですが、さらに江戸時代においては将軍家と大名家との華々しい贈答のエピソードでも知られています。このように名刀は人から人へと受け継がれていく間に、戦や贈答にまつわる輝かしい由緒を得ていきます。そして折り重なったこれらの由緒により、名刀に備わる品格は、ますます高められていったのです。

ところで、歴史学においては刀剣の由緒が事実か否か問われることもしばしばあります。しかし、由緒を考える上で大切なのは、その由緒が多くの賛意を得て現代にまで伝わっているという点です。例えば「太刀 銘 三条 名物 三日月^み宗近^{かづむね}」(画像②)には、三日月^{しかのすけ}を信奉したとされる悲運の猛将・山中鹿介が



①国宝 太刀 銘 長光 名物 津田遠江長光 鎌倉時代 13世紀
織田信長・明智光秀・津田重久・前田利長(加賀前田家2代)ほか所持 徳川美術館蔵



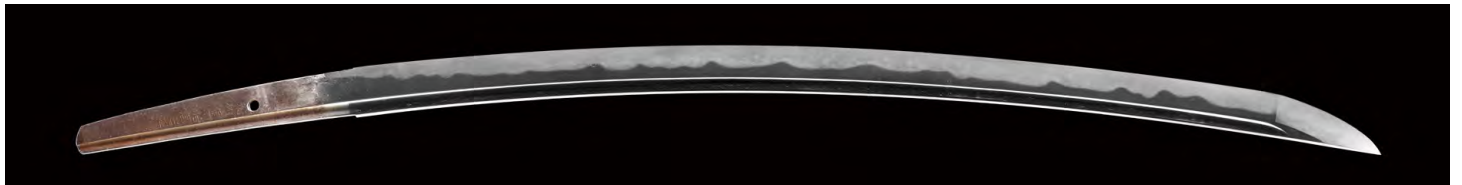
②国宝 太刀 銘 三条 名物 三日月宗近 平安時代 10～12世紀
おね(豊臣秀吉正室)・徳川秀忠(2代将軍)所持 東京国立博物館蔵(展示期間 7/29～9/7)

所持したという伝説があります。こうしたエピソードは、名刀にさらなる神秘性と情感を加えています。「刀 銘 九州日向住国広作(略)(号 山姥切国広)」(画像③)に附属する山姥を切った伝説は、名刀の切れ味を讃えるとともに凄みを与えています。事実か否かにかかわらず、長い歴史の中で加えられていったこれらの物語が、名刀の品格を高め、その価値を揺るぎないものにしてきたことは間違いないでしょう。

本展では、名刀の魅力に迫る前提として、刀剣の外装である刀装から、武家と刀剣の関わりも紹介します。刀装は用途に相応しく作られ、また時代や持ち主の好みも反映されます。桃山時代の奇抜で華やいだ雰囲気を感じられる伝前田利家所用「朱漆塗雲龍蒔絵鞘大小拵」(画像④)や、儀式用に煌びやかに仕立てられた徳川義直所用「葵紋散螺鈿黄金造太刀拵」(画像⑤)など、大名家ゆかりの刀装は地位に相応しく華麗で多彩です。一方、蠟色

塗(艶やかな黒漆色)の拵は一見すると目立ちませんが、蠟色は武家が公務などで正式に用いる鞘の色です。徳川家康から真田家2代信政へ贈られた松代真田家の家宝「短刀 銘 吉光」(長野県宝・真田宝物館蔵)にも同様の蠟色塗合口拵が附属していますが、この拵に附属する目貫・小柄は極めて高い価値を有する後藤家初代祐乗作と伝わり、家宝の刀剣の品位を示しています。このように刀装には、持ち主の家格や、そこに収められる名刀の品格が、細部にまで意を凝らして表現されているのです。

名刀とは、多彩な美しさを備え、かつ江戸時代の武家社会においては、武家の名誉や誇りを端的に表す由緒を持つことにより、唯一無二の存在として認識された宝物です。それぞれの名刀の美しさをご堪能いただきながら、由緒や刀装を端緒に歴史に思いを馳せ、その一口が超えてきた時の流れを感じていただければ幸いです。



③重要文化財 刀 銘 九州日向住国広作 天正十八年庚子貳月吉日平顕長(号 山姥切国広)
長尾顕長所持 桃山時代 天正18年(1590) 公益財団法人 足利市民文化財団蔵 (展示期間 6/14~7/27)



④重要文化財 朱漆塗雲龍蒔絵鞘大小拵 桃山時代 16世紀
伝前田利家(加賀前田家初代)所用 石川・尾山神社蔵 (展示期間 8/12~9/7)



⑤葵紋散螺鈿黄金造太刀拵 江戸時代 17世紀
浅野長晟(広島浅野家初代)・徳川義直(尾張家初代)所用 徳川美術館蔵

展覧会紹介 02 刀装の魅力

板谷寿美 (学芸員)

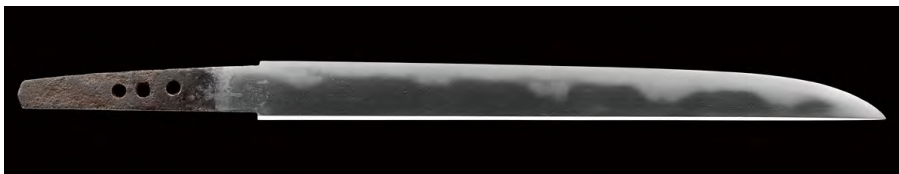
本展第一部でご紹介する刀装は、刀剣に比べれば馴染みが薄く、少々マニアックかもしれませんが、その魅力は計り知れません。刀装は柄・鞘・鐔などで構成されるいわばトータルコーディネートです。多分野に跨がる工芸の技術を結集させた点は見どころの一つです。

ところで刀装のうち三所物などの金工品は将軍・大名家に重用された後藤家やそれ以外の金工である町彫の職人などが製作にあたりました。後藤家は主に赤銅と金を用いた格調高い品を、町彫の職人は多様な合金を用い、ユニークでインパクトのある品を多く残しています。多くの刀装具は両手に収まるほどのサイズです。しかしその小さな作品の中には金属の組み合わせや鑿の使い分けなど優れた彫金技法がつまった大きな宇宙が広がっているのです。

展覧会紹介 03 山城の名刀

並木昌史 (学芸部マネージャー)

刀剣三大産地といえば、山城(現・京都府)・備前(現・岡山県)と相模(現・神奈川県)が挙げられます。このうち山城で作られた名刀が、本展で合計20口出陳されます。山城の刀工のうち最も名高い三条宗近による国宝「太刀 銘 宗近 名物 三日月宗近」(画像②)は、日本刀の様式が成立した初期の名刀として注目されます。また当館を代表する山城刀



⑥国宝 短刀 無銘 正宗 名物 日向正宗 鎌倉時代 14 世紀
豊臣秀吉・石田三成・水野勝成・徳川頼宣(紀伊家初代)所持
東京・三井記念美術館蔵 (展示期間 7/29~8/11)



⑦重要文化財 刀 銘 本作長義 天正十八年庚子五月三日ニ
九州日向住国広銘打
長尾新五郎平朝臣顯長所持
天正十四年七月廿一日小田原参府之時従 屋形様被下置也(部分)
南北朝時代 14 世紀
北条氏直・長尾顯長・徳川綱誠(尾張家3代)所持
徳川美術館蔵

の名品「短刀 銘 吉光 名物 後藤藤四郎」や「太刀 銘 来孫太郎作(略)」(いずれも国宝)のほか、重要文化財「刀 銘 九州日向住国広作(略)(号 山姥切国広)」(画像③)や「脇指 銘 吉光 名物 鯰尾藤四郎」(当館蔵)など話題となった名品も見逃せません。展覧会期間中展示替えがあります。この機会に、お目当ての一口との出会いをお楽しみに。

展覧会紹介 04 備前の名刀

高橋哲也 (学芸部マネージャー)

本展第二部「刀剣」では、平安から南北朝時代にかけての日本刀黄金期を彩った名工たちの代表作が一堂に会します。製作された当時の時代色を反映した姿、流派や作者の特色が表れた地鉄・刃文などに着目し、芸術的な側面から楽しむことも、刀剣鑑賞の醍醐味のひとつです。

とりわけ中世を通してわが国最大の生産地であった備前国で生み出された名刀は、日本刀剣史における重要な作品が揃います。平安時代後期に遡る古雅で優美な古備前正恒の太刀をはじめ、鎌倉時代に開花した丁子乱の絢爛華麗な焼刃を特色とする福岡一文字派の吉房・助真の傑作、そして名刀の代名詞でもある長船派の祖・光忠を筆頭に、系譜に連なる長光・兼光・長義らの覇気溢れる作品など、時代の変遷とともに通覧いただけます。最高峰の名刀の数々を通して、豊饒な備前刀の世界をお楽しみください。

「時をかける名刀」関連企画のご案内

徳川美術館史上最大規模の刀剣展となる「時をかける名刀」は、巻頭でお伝えした通り展覧会が充実しているばかりではなく、関連するおもてなしの部分でも多数の企画をご用意しております。

※詳しくは右のQRコードより「時をかける名刀 特設サイト」をご確認ください。



その1 伯仲燦然

「刀 銘 本作長義(略)」と「刀 銘 九州日向住国広作(略)(号 山姥切国広)」(公益財団法人足利市民文化財団蔵)は本歌と写しとして共に現存、かつ双方が重要文化財に指定されている唯一の作例です。この2口を並べて鑑賞したい、という刀剣愛好家の皆様の願いを形にしたのが前期日程(6/14～7/28)で開催される展覧会内企画「伯仲燦然」です。2月に足利市立美術館で開催された「伯仲燦然」に続く名古屋開催です。伯仲の名刀が燦然と輝く様をお見逃しなく！

その2 「刀剣乱舞ONLINE」とのコラボレーション

2021年に続き、4年振り2回目となる「刀剣乱舞ONLINE」とのコラボレーション。TBSの人気番組「マツコの知らない世界」でも見逃せない展覧会として紹介いただき、全国的にも大きな話題となりました。当館所蔵の日本刀をモチーフとした刀剣男士の書き下ろしイラスト公開など、盛りだくさんのコラボをお楽しみに！



その3 日本の美をつなぐ刀剣ミュージアムグッズ

毎年新しいデザインで展開する当館の刀剣ミュージアムグッズ。90周年を記念する今年は「日本の美をつなぐ」という当館の理念をデザイン化します。和の伝統を感じさせる柄に、七宝焼や注染^{しっぽう やき ちゅうせん}てぬぐいなどの伝統工芸とコラボした商品展開で、皆様の日常に日本の伝統美をお届けします。お盆までは講堂を特設売店とし、レジも増設しますので展覧会の後にぜひお立ち寄りください。

その4 カード型音声ガイド

ご自身のスマホでお楽しみいただける音声ガイドは、カードに掲載されたQRコードを読み込んでいただく方式です。読み込んでから12時間有効、さらに作品画像も一部表示されるので、ご自宅で図録をみながらゆっくり楽しめます。通常の音声ガイドに加え、刀剣乱舞ONLINEとのコラボレーショントラック付きです。※イヤホンを必ずご持参ください。

その5 美術館で名古屋めし

美術品で心をいっぱいにした後は、美味しいものでお腹もいっぱいに。美術館中庭には「世界の山ちゃん」や、「関谷醸造ほうらいせん」などのキッチンカーが並びます。日替わりで登場いたしますのでお楽しみに。※都合によりキッチンカーの出店がない日もございます。

エッセイ

90周年おめでとうございます。

徳川美術館90周年おめでとうございます。現存最古の国宝「源氏物語絵巻」をはじめ多種多様な美術品を有し保存研究をされ、日本文化を今に次代に継承する活動をされているばかりでなく、私立美術館博物館の地位向上に、日本の博物館活動の振興に寄与されていたのが、尾張の徳川美術館であり徳川義宣前館長でした。そして当時主催された私立美術館の集いに私も参加しました。各館の学芸のテーマに従って発表し意見をかわし、その後の懇談会で交流を深めました。そうした議論の中で、大名道具や資料が意外と解明されていないことで徳川館長は井伊正弘彦根城博物館前館長と計って、大名道具収蔵館の集いを始められました。その5回目は平成8年山形県の致道博物館が幹事館で記念企画し、県内外の美術博物館によびかけ開催しました。徳川館長、井伊館長、酒井忠明致道博物館前名誉館長をパネラーとして、コーディネイターを濱田直嗣仙台市博物館館長で、「大名と風土」をテーマに鼎談を一般公開し開催しました。興味のつきないおもしろい鼎談でしたが、「単にノスタルジアに駆られて過去をふりむくのではなく、その中から先々の我々の進むべき道の指針を得られればと考えています」という徳川館長のお話が印象に残っています。井伊館長は東大農学部出身で、徳川館長も同学部に一時籍を置き、父忠明も『酒井忠明写真集 出羽の国庄内農の風景』を出版していることから、代々農の重要性を受け継ぐことに共感を覚えました。

その後平成23年徳川義崇館長のもとで同会合に10年ぶりで出席した時には、徳川美術館は環境が整備され、益々美しく充実した施設となっていました。徳川美術館そして水戸の徳川ミュージアムにおいて葵のご紋にたいする質問が一番多いとうかがっ

公益財団法人
日本美術刀剣保存協会 会長
公益財団法人
致道博物館 顧問・名誉館長

さか い ただ ひさ
酒井 忠久



酒井家18代当主（徳川四天王酒井忠次末裔）、山形県鶴岡市名誉市民。

公益財団法人日本美術刀剣保存協会会長 刀剣博物館館長、公益財団法人致道博物館顧問・名誉館長、一般社団法人裏千家淡交会理事、荘内銀行取締役監査等委員会委員、出羽三山崇敬会会長、公益財団法人人間美術館理事に就任されるなど、数多くの要職を務める。



第5回大名道具収蔵館研究会の様子

た研修の後は館内の宝善亭でなごやかに参加各館と懇談交流を深めました。徳川美術館では「太刀銘 包永^{かねなが}」はじめ貴重で大切な刀剣が展示されていました。

今日では刀剣は美術品として大切に扱われますが、第2次世界大戦後、刀剣は武器であるとして没収の危機がありました。日本全国の愛刀家が団結して古くから日本に伝わる「美術刀剣」であるとアメリカに強く訴えました。理解をしめした米軍キャドウェル大佐から親身な忠告をうけました。「日本刀を護ることを国に依存するだけでなく、本当に日本刀を愛好する人々自身で護ることが重要である」。この言葉が力となり日本美術刀剣保存協会が設立されました。今もなお愛刀家が心している言葉となっています。

明治時代の聞香席の再現

学芸部マネージャー 並木 昌史

茶道で茶の湯を行う場を茶席と呼ぶように、香道で香りを楽しむ場を聞香席^{もんこう}、または香席と呼びます。

京都にかつてあった岡崎町美術館で、明治36年(1903)3月15日から7月12日まで開催された古美術品展覧会のなかで、江戸時代に行われた儀式・芸能・茶の湯・香などの席での室内装飾16種の再現展示が行われました。その16種の再現展示には、各々の場面にふさわしい古美術品が選ばれ、皇室・皇族・旧公家・旧大名家など約120家からの出品によって開催されました。展覧会は大好評を博し、入館者は10万人を数えたことから、この意義深い展覧会の姿を伝えるため、精巧な木版多色刷りで室礼風景^{しつらい}を収めた豪華図録『旧儀装飾十六式図譜』と解説書が製作・刊行されました。この書物は長らく入手困難でしたが、平成6年(1994)に社団法人霞会館^{かすみかいかん}によって復刻されました。

尾張徳川家の18代義礼^{よしあきら}(1863～1908)も主催者の依頼を受けて、聞香飾席に薫物壺・十種香箱・文台・硯箱・重硯箱・四種盤・香盆・伽羅割道具を出品したとあります。これらは現存する俊恭院福君の菊折枝蒔絵調度であったことも、解説書の目録によってわかります。木版画の図版(右上)に目を移すと、床の前に立てられた屏風の前には梨子地の香道具が並べられ、蒔絵の模様が描かれています。この聞香席の飾り付けは、名古屋在住の香道志野流蜂谷家の指導を得て行われたとあります。徳川美術館では平成8年(1996)の秋季特別展「香の文化」のなかで、明治36年に行われたこの聞香飾席を、一部借用品で補いながら、徳川美術館に残る作品で再現を試みたのが右下の図版です。

明治36年というと、明治維新以来西洋化が進んだ時代ととらえられがちではありますが、西洋化の進む一方で、伝統的な日本文化への理解が深まった時期でもありました。また36年を遡れば江戸時代であり、江戸時代に生を受けた伝統文化を伝える人々が健在であったことを考えると、このような意義深い催しを現在まで木版画で伝えてくれた先人たちに感謝の念を覚えます。



『旧儀装飾十六式図譜』より聞香飾席



平成8年(1996) 秋季特別展「香の文化」より聞香飾席

次回 展覧会紹介

徳川美術館・蓬左文庫 開館90周年記念 秋季特別展

尾張徳川家 名品のすべて

9.13(土)～11.9(日)

会場 徳川美術館 名品コレクション展示室
 名古屋市蓬左文庫展示室
 徳川美術館 本館展示室

令和7年(2025)の11月、徳川美術館と蓬左文庫は開館90周年を迎えます。昭和10年(1935)、徳川美術館は名古屋で開館し、蓬左文庫は東京目白の尾張徳川家邸内に開館しました。そののち、蓬左文庫は同25年(1950)に名古屋市に移譲されました。御三家筆頭であった尾張徳川家の収蔵品とともに守り伝える施設として、類いまれな文化財とそれらに息づく大名文化を、地域と世界、そして未来へ伝えていく役割を果たすべく、活動を続けてきました。

本展では、江戸時代の尾張徳川家が大切にしてきた収蔵品に加え、近代以降の購入品・寄贈品も含めた現在の館蔵品の中から、重要文化財を含む名品を主として、昭和から令和に至る90年の歩みを物語る関連資料を交え、徳川美術館と蓬左文庫の多彩なコレクションを紹介します。

会期中、展示替えがあります。

〔前期〕9月13日(土)～10月13日(月・祝)

〔後期〕10月15日(水)～11月9日(日)



重要文化財 長生殿時絵手箱
鎌倉時代 13～14世紀



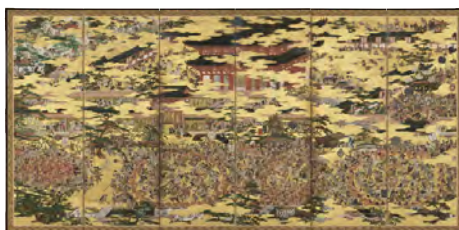
重要文化財 紫地葵紋付葵の葉文辻ヶ花染羽織
徳川家康・徳川吉通(尾張家4代)着用
桃山～江戸時代 16～17世紀〔前期〕



重要文化財 高麗史節要 金宗瑞等撰
35冊の内
朝鮮王朝 景泰4年(1453)刊
名古屋市蓬左文庫蔵



重要文化財 瀟湘八景 遠浦帰帆図 玉潤筆・同賛 大名物
足利義満・太原雪斎・今川義元・北条氏直・豊臣秀吉・
徳川家康ほか所用 南宋時代 13世紀〔前期〕



重要文化財 豊国祭礼図屏風
岩佐又兵衛筆 六曲一双の内 左隻
蜂須賀家伝来
江戸時代 17世紀〔後期〕

葵 徳川美術館 第135号

発行年月日:令和7年7月1日

編集発行:徳川美術館

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1017

TEL(052)935-6262

<https://www.tokugawa-art-museum.jp/>

表紙

重要文化財 刀 銘 本作長義 天正十八年庚子五月三日ニ九州日向住国広銘打

長尾新五郎平朝臣顕長所持 天正十四年七月廿一日小田原参府之時従 屋形様被下置也

南北朝時代 14世紀 北条氏直・長尾顕長・徳川綱誠(尾張家3代)所持 徳川美術館蔵



南北朝時代に活躍した備前国長船派の長義による刀で、足利(現・栃木県)を本拠とした戦国武将・長尾顕長(1556～1621)が、天正14年(1586)、小田原にて主君・北条氏直から拝領した品です。天正18年の小田原合戦では、顕長は氏直のもと天下統一を目前にする豊臣秀吉と戦います。その最中に、顕長は拝領の経緯などを含む銘文を、刀工・国広に命じて本刀に刻ませました。国広が本刀を本歌として作刀したとされる「刀 銘 九州日向住国広作(略)(号 山姥切国広)」(公益財団法人 足利市民文化財団蔵)も現存しています。

公益財団法人 徳川黎明会

活動支援基金寄附者名簿

■ 法 人 ■

宗教法人 高岳院

宗教法人 政秀寺

株式会社名豊本社

株式会社八百彦本店

株式会社山本油店

大雄山性高院

合同会社むらやま

名古屋徳川ライオンズクラブ

一般財団法人坂文種報徳会

(社) 茶道裏千家淡交会
愛知第二支部

石州流茶道宗家石州会
愛知支部

■ 活動支援基金のお願い ■

寄附の用途

徳川美術館および徳川林政史研究所の作品購入、収蔵品に関する
修理・研究調査・教育普及および環境等の整備拡充など

寄附金額

個人 一口一万円 法人 一口十万円 何口でも結構です。
所定の振込用紙で郵便局または銀行からお振込みいただけます。
振込用紙をご希望の方は当館寄附係まで御連絡ください。

公益財団法人 徳川黎明会

活動支援基金寄附者名簿

■ 個 人 ■

ア	赤堀康彦 秋田節子 浅井みちよ 朝岡多磨美 旭 勝春 麻生由香 阿部隆夫 雨宮秀樹 有賀和子 安藤浩行 飯岡正毅 飯島邦彦 井口正俊 石山秀和 伊東與有三 岩下哲典 上野秀治 内田裕美 大石浩哉 大崎 晃 大島真理夫 大野淑子 岡田健児 緒方嘉隆 奥川忠洋	カ	笠井 朗 加藤衛拡 加藤禎男 貴布根楯雄 金 リンダ リ 清野久美子 清野英彦 後藤宗理 小林春子 小宮山敏和 近藤昭彦 近藤尚也 齋藤恵美 坂本達彦 櫻庭茂大 佐々木剛志 佐藤孝之 澤 貴弘 柴田耕志 清水恵五 白根孝胤 新崎 鈞 新崎美至子 鈴木要一郎 染木知夫	タ	高木俊輔 高山慶子 滝 正 竹内美智代 田渕俊夫 千葉晃泰 辻 智美 寺田ゆかり 徳川喜壽 富田和枝 富田 茂 長尾茂行 長澤大悟 長澤弘宣 南雲和江 新美達也 西尾千歳 西 光三 西田佳子 西村敏子 橋本暢子 服部はるみ 平田米男 平塚泰三 平本裕美子	フ	広瀬千明 深井雅海 深谷比呂美 福澤宏昭 伏屋重晴 堀井邦彦 堀井久美子 前田種男 松尾美恵子 水谷鎮夫 宮島宏子 宮田励司 村井俊哉 村上賢瑞 持留宗一郎 森 安彦 八神 基 柳澤由希 山崎久登 山本英二	ホ		マ	ミ	ム	モ	ヤ
---	--	---	---	---	---	---	--	---	--	---	---	---	---	---

※敬称略・五十音順